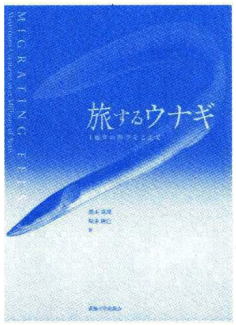
本棚ぶらり

うなぎの研究



『旅するウナギ』
（黒木真理・塚本勝巳／著
東海大学出版会　2011）

ウナギの生態について少しずつ分かってきた部分もありますが、全てが解明されたわけではありません。まだまだ謎に包まれています。その解明の足がかりというべき研究の一端がわかる本をご紹介します。

『アフリカにょろり旅』（青山潤／著 講談社 2007）は研究者である著者達が、ウナギを求めて旅する冒険記です。ウナギの形態と遺伝子を調べるという研究で、ウナギ全種類の標本を採集することになり、最後の１種を探してアフリカへ。行く先々で耳にした噂話や地図だけがたよりという乏しい情報の中、行き当たりばったりで湖や川に向かいます。炎天下で２時間近く歩いたり、食堂で不思議な毛がからみついた肉がでてきたり、手持ちの飲料水が底をついたりと、きわめて過酷な環境です。それでもウナギを探す著者の情熱に圧倒されます。

陸での探索に続いてご紹介するのは、海上での研究です。ウナギは海と川とを行ったり来たりする魚です。『世界で一番詳しいウナギの話』（塚本勝巳／著 飛鳥新社 2012）には、2009年に世界で初めて天然ウナギの卵を採集し、産卵場所の謎が解き明かされる様子が書かれています。調査には、椀子そばの「お代わり」を思わせるようなものもありました。大量のプランクトンのサンプルを、少しずつ小さなガラスの容器に入れ、卵や孵化直後のウナギを探す作業を、サンプルがなくなるまで繰り返すのです。次の調査地点に着くまでに終わらせるのは時間との戦いで、厳しいものだったそうです。

さて、養殖の研究にも触れておきます。卵から成魚までを人工的に育てる「完全養殖」が実験室レベルで成功しました。『うなぎ 謎の生物』（虫明敬一／著 築地書館 2012）では、達成までの歴史をたどることができます。どうして養殖ウナギは雄ばかりなのか、どうして養殖では産卵しないのか、どうしたら餌を食べるのか、立ちはだかる壁を打ち破っていく研究者の苦労がうかがえます。

『旅するウナギ』（黒木真理・塚本勝巳／著 東海大学出版会 2011）には、今までご紹介した３冊に出てきたウナギ全種類の標本、天然ウナギの卵、養殖ウナギの成長段階が写真で紹介されています。

大人も楽しめる 絵本の世界 第10回

『うなぎのうーちゃんだいぼうけん』

くろき まり／文　すがい ひでかず／絵
福音館書店　（2014）

誰もが知っている身近な存在なのに、その詳しい生態は謎に包まれていたウナギ。2009年にマリアナ海溝で、世界で初めてウナギの卵が見つかり、長年謎だったウナギの産卵場所がようやくわかりました。この発見を受けて研究は進み、近年になってその生態を紹介した本が数多く出版されるようになっています。しかし低い年齢の子どもでも楽しめるような科学絵本でおすすめできるような本は、これまでほとんど出版されていませんでした。

そんな中、昨年出版された『うなぎのうーちゃんだいぼうけん』は、待望の一冊といえるでしょう。南の海で生まれた「うなぎのうーちゃん」は、潮の流れに乗り日本にやってきます。海から川に上るウナギを狙って、漁が行われます。ここで捕獲されたシラスウナギと呼ばれるウナギの稚魚を養殖したものを、私たちは普段食べているのです。漁から逃れたウナギは川を上り、川で５～10年くらい暮らします。様々な試練を乗り越え、再び海へ戻るウナギの大回遊の物語です。

物語絵本の様式で、顔だけは多少デフォルメされたウナギにはなっていますが、何よりも色鮮やかで迫力のあるイラストが目を引きます。表紙を開けると、見返しの部分には、見事に成長したウナギの実寸のイラストがドーンと載っていますので、ぜひ本を手に取ってご覧ください。「ウナギってこんなに大きかったんだ」と感動すること請け合いです。